

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	元禄文學の一奇才：雑録
Author(s)	嶺風生
Citation	龍南會雑誌， 1 1 4： 5 0 - 5 7
Issue date	1905-11-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5907
Right	

雜

元祿文學の一奇才

嶺 風 生

○前なるものと唱ふれば後なるもの喁と叫び、呼號角逐して一世の盛觀を極めたのは元祿の文學である、此時に當つて筆を執て嶄然頭角を顯はし、大に當世を風靡し、延びて二百年後の明治文壇に功獻することの多かつたものは、云ふまでもなく井原西鶴、近松巢林、瀧澤馬琴の三人である。

○予が茲に元祿文學の一奇才と題し、予が感想を述べんとするは、即ち井原西鶴其人である。こは予が西鶴の書を耽讀して彼が文才の偉なるを感佩するの餘り、出鱈目に書き散らした西鶴に對する一片の雜感に過ぎないのである。

○誰でも西鶴と云ふと直に好色本を聯想し、西鶴を以て好色専門の作者のやうに思ふてゐるが、彼が梅翁門下の俳人として一方に雄飛したるを想ふて見ると、何故に是まで高潔なる生涯を營んで居つた彼が、浮世草紙に筆を染むるに至つたかに就て奇異の感を生ずるのであるが、この事情は次の三に起因するであらうと思ふ、一は當時の事勢、二は彼の性質、三は其師宗因の死去、是である、一は當時人情浮華輕俳、遊戲盛んに行はれ、奢侈の弊は續出し、従つて狎褻の繪画等流行して、淫

猥の戯作技に上り、頻りに一世の嗜好に投じて居つたので、西鶴も此事勢の潮流に驅られて、蒼鷹一搏の技を演せんと欲したのである。二は彼の奔放不羈の氣質は到底俳諧の点者などを以て甘んずべきでない、其豊富なる詞藻を以て浮世草紙に羽翼を延ばさんとしたのは正に然るべきである。三は彼はかく決心はしたものと、已が俳人たる品位を顧み、またその師宗因を憚かりて、一時其意を強いて抑へてゐたらしい。時なる哉天和二年三月廿八日師西山宗因が黄泉の人となるや、彼は忽ち勃然として起り、同年十月初めて『二代男』を梓に上したのである、此書の大に世人の歡迎を受くるに及んで、此凄まじき人氣は其動機となりて『二代男』を作り、以後世を終るまで諸種の戯作を著すに至つた。

◎彼の赤手を以て古風の俳諧を打破し、談林派を開き、松尾桃青をして上に宗因なくんば、我々が俳諧は今に貞徳の誕をねぶつて居たであらうとまで賞賛せしめた西山宗因の偉なるは、今更云ふまでもないことだが、之と共に彼が左右の腕となり、能く談林派をして九鼎大呂よりも重からしめた彼が高弟椎本才磨、井原西鶴を忘れてはならない、才磨の清雅さ、西鶴の奇巧とは兩々相俟て談林派の勢力を増し、俳壇の霸權を握ること五十年に及んだ、が盛と衰とは相離れざるもので隆盛てふことは已に衰微を意味して居るのは事物の常態である、こも其例に洩れず晩年に至つては、さしも一時飛鳥を落す勢があつた談林派も、次第に厭倦せらるゝ傾向がほの見え出して來た。

◎是より先、正風の新芽は微に萌して、守武は花實の兼備せなければならぬと言ひ、貞室は吉野山の名句を吐いて、その機運を促がして居た。當時の談林派は實に風前の燈で、唯宗因の輕妙猾脱と

才磨西鶴「奇才」とによりて、辛うじて其命脈を保つて居たのである。事態已に此の如き時は當りて、その領袖宗因が永逝は、忽ち談林派をして四分五裂せしめ、才磨西鶴ありとて連も之を收拾して以前の勢力を保持し得ることの出来なくなつたのは明かである、宗因は實に千斤の鼎を釣つてゐる一髪の糸であつたのである、彼の爛眼は早くも此形勢を看取して、その凋落の悲運に遭遇せることを悟つたので、長く俳壇の一隅に屏息するの頗る得策ならざるを知りて、翻然として浮世草紙に筆を揮ふに至つた。彼が師の繫累なく、地位の束縛なく、自由自在に其豪放なる意氣を發揮したるは、殆かも是れ鉄鎖を放れたる獅子が廣莫たる大原野に、心ゆくばかり大嘯するの慨があつたのである。

◎彼が處女作『一代男』は四十二才の作で前に言つた如く天和二年であつた、是より六年間、即ち貞享四年に至る迄は専ら好色本を著した時代で、それより以後死する迄は好色本以外のものを著述した時代である。

◎彼が奇警縦横よく當時の社會を映して一世の喝采を博した『一代男』の成功は、遂に『二代男』を作らしめた、が是れ亦非常の人氣であつた、彼は之に力を得て次で『三代男』を著し、一轉して洒落の戀を描き、再轉しては輕妙滑脱、趣味津々たる『五人女』を作りて、戯作界に於て乃公の外人なしの意氣を以て横行濶歩し、進んでは『男色大鑑』『武道傳來記』によりて、彼が獨特の長所を遺憾なく發揮して、當時の戯作社會を縦横無盡に切りまくりて、他の作家をして啞然として云ふべき言葉もないやうにやつけた勢は物凄い程であつたのである。

◎是等の好色本を一々取擧げて評論するのは、實に面白くて又興味多き事であるが、是に關しては諸大家の評論が澤山あるから茲には省くこととする、唯好色本以外の書に就ては一言述ぶるもあながち無益のことであるまいと信する。

◎世人は西鶴を好色本以外には何の能もないものと思つてゐるが、事實は決してさうではない。世人が今までやかましう論じたのは好色本の西鶴で、好色本以外の西鶴は等閑視せられてゐる、これは最も西鶴の爲めに悲しむべきことではあるまいか、此の如きは何から起つたであらうか、西鶴の奇才は好色本にのみ偏して、これ以外には發展しなかつた爲であらうか、將たまた晩年になつて筆力の減退した爲めであらうか、こは勿論大なる謬論で彼の奇才が區々たる好色本の片隅に偏したことではなく、又其健筆が後來退歩したのでもない。

◎横濱に世人がかく好色本のみを持て囃して其他に及ばない理由は、好色本と其他の好色本以外の本との出版年月を考へるとよくわかる、即ち前者は西鶴生前の出版で、後者は概ね西鶴死後に發行したものである、さてこれが何故其理由になるかと云ふとこうだ。

◎西鶴の名聲が隆々として旭日昇天の勢であつたので、彼の死するに機に敏き書舗は奇貨乗すべしとなじ、巨利を博しやうとし、西鶴の門人弟子は此機に際して虚名を得やうとも、争ふて書舗の需要に應じて、西鶴の名で出版したものが多し、此等の中には西鶴自身の筆も交はつてゐるだらうか、大概は門人弟子が彼の文章に自筆を加へて長く引延ばしたり、或は全く自己の筆に西鶴の名を冠らしめて出版したものであるから、連も皮相の見を以て、眞偽を判別することは出来ない。世人が

◎以下彼が文章に就て卑見を述べやう。
◎西鶴が文章は之を小説として見る時は、その技挿寔に幼稚で、てんで御話しにならない。これは好色本も好色本以外のものも皆然りである。彼は今の用語もて言へば、天外一派の寫實派であつて、自己の眼目は觸れたるもの、新羅萬象悉く之を仔細に觀察して冲天飛揚の具となしたのである。それだから彼が管城子に墨含ませて紙に落すや、一局の景を描くに専らであつて、空篇の趣向を構はるに暇がなく、單調にして蕪雜、粗笨にして無味驚く程である。如何に西鶴の肩を持ちたい諸君でも彼の文章を指して完全なる小説とするやうな馬鹿はあるまい。
◎加く、如く小説としての彼の文章は拙劣極まるものである。それにも拘はらず世人が之を稱揚して止まないのは、如何なる理由に基くであらうか、彼の文章の流麗なるが故であらうか、否々彼の文章を來たらち支離滅裂で、流麗なんどは藥にしたくもない、而して其用語の不規律なるにこそ是亦驚かざるを得ない。馬琴は西鶴を評して『此の人壯裏に一字の文學なし』と云つたが、彼の文章の上に現は

純然文法上の誤謬の甚しきを見れば、或はさうかも知れぬ、兎に角彼が文章に文法に合はないで、文片言めきたること多きは蔽ふべからざる事實で元祿太平記に『元より西鶴文盲にして書法を知らず、其証據には好色一代男世の助島渡の段に、いのこづらと午膝と別に書けり、午膝の和名をいのこづらといへば名は二つあれども本一種なり、西鶴が心にはいのこづらと午膝とは別の物と思ふにや、斯様に世俗まで辨へたる事さへ考へぬ西鶴なれば、況して其外の事取るに足らず、或は曾子の詞を孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語にゆづりたるも可笑、凡て西鶴が作れる草子には大小の誤りあらずといふことなく、只管片言を載せずといふ事なし』と云つたのは否認すべからざる論である、誰か西鶴の文を以て語格文法に適へり」と云ふものがあらうか、また誰か西鶴の戯作を以て小説の上乗と云ふものがあらうか、既に彼の著は小説として拙く、その文は粗笨蕪雜であるのに、猶彼の著作に一種の妙味あるは、如何した所以であらうか。

◎前述の如く西鶴は四十二才まで純然たる俳人であつた、で彼が後世浮世草紙に筆を執るやうになつたからとて、先入主となつた俳諧は逆も易々と彼の腦裡を脱却する筈がない、まして俳壇の英雄將として談林派の牛耳を握つた西鶴だもの、彼が戯作をなすに當つても其思想文章、凡て俳諧的になつてゐるのも無理はないことである、又俳諧的と云つても談林派の俳諧的であつたのも、是亦尤もな次第と云ふべきである。

◎談林派と云ふのは彼の貞徳時代の法則とか、何んとか面倒臭い凡ての束縛を脱して、自由奔放な士体を形成したもので『用附も、てにをはも、指合も、去嫌も總て顧みるに足らず』(俳諧蒙求)との

主義で、俗語でも漢語でも、失鱗滅法に使用し、大膽で、極めて頑氣縱横の態がある。阿蘭丸二番船序に『上手は上手、下手は下手、いづれを是とわきまへず、すいたこととして遊ぶにもしかじ』とある。こは俳階の上にいつたものなので、次で談林派の風調を覗ふことが出来やう、西鶴たるもの豈談林の旨を得ざらんやで、こは實に西鶴が奉じて三尺とする所で、彼はこの意味を以て十七字を作りたるのみならず、廣く戯作の上に及ぼしたのである、彼が『五人女』『二代男』『二代女』等に種々の戀愛を集めて、各方面より、描寫したけれど、その中始終を一貫する軌道の存するを看取することが出来るのである。

◎彼の文章は誰でも之を支離滅裂と云ふに躊躇しないのであらうが、かくも支離滅裂な文章にして、猶大に味ふべきものがあるのは、是れ西鶴の西鶴たる所以で、古今に獨歩するものも是れが爲ではなからうか。彼の文体は云はゞ雅俗混用体で、談林派の驍將たる彼は、其風格を茲に及ぼして、當時の口調を其儘文中に注入してゐる、西鶴の普通文章已に誤謬多いのに、かへて加へて口語を注入せんとしたので、さなきだに支離滅裂の文章は層一層の破綻を來たしたのは、また深く咎むるに足らないのである、予は二百餘年前の昔に於て西鶴が大膽にも、かゝる文体の創作を企てたる勇氣に感ずると共に、明治の文士をしてその恩澤に浴せしめたるの功を衷心から謝せなければならぬ。蓋し紅葉露伴其他現代の作家で成功したものは、實に西鶴の力多きに依るからである、彼の鏡花を以て一世の鬼才となし、鏡花はぬらひと嘆美の聲を惜まざる、そんなじよをこゝろの人々よ、須く去つて西鶴を読み給へ、再讀三讀、熱讀精讀してから、始めて紅葉、露伴、鏡花の諸作に對し給へ、先き

賛賞に堪へなかつたものも、左程難有くないやうな感じがするであらう。

◎予は前に舉げた元祿時代の三大文豪の中、今日までの文壇に寄與したる功績の大なるものは、井原西鶴唯一人であると云ふを憚らない、巢林子、馬琴によりて成功したるものは殆んどなしと云つても差支ない位であるのに、獨り西鶴の感化のかくも大なりしかを想ふに及んで、予は西鶴を最も偉なりとするものである。嗚呼予が濟々たる文祿時代の文學、否日本文學史中、先づ西鶴を推す所以のものは、寔に此点に存するのである。

◎終りに臨んで一言すべきことがある、矢鱈に外國文學にのみ、現をぬかして、國文學の素養に極めて欠ぐる所あるは現今一般の通弊ではあるまいか、予は敢て竹風の提灯持をするのではないが、飽まで日本文學を咀嚼して、自家藥籠中のものとなしたるものこそ、外國文學を云爾する資格あるものと云ふべきである、予は本校生徒の中に巢林子は誰でしやうと尋ねられたことがあるが、實に一驚を喫した、而かもこれが二部三部のものから出たなら聊か恕すべきが、殊に文科の御方と來てゐるから、開いた口が塞がらぬではないか、其癖やれ沙翁がどうの、バイロンがどうの、スフィンバインがどうの、イテセンがどうのとよく云へたものだ、予は彼等を見て可笑よりは寧ろ氣の毒でたまらない、此等の輩に予は、西鶴なりと一讀せしめたいと思ふのである。(十月十日)

沖かけて八重の汐路をゆく舟は

ほのかにぞきく初雁のこゝろ

